

『言葉と物』における古典主義時代の知

大西 宗夫

(人文学部欧米文化コース)

Le savoir à l'âge classique dans *Les Mots et les Choses*

Muneo ONISHI

(Cours des cultures européenne et américaine)

フーコーが、2000人の思想史の専門家のために書いたという『言葉と物』が、出版と同時に、その華麗な文体と「人間の終焉」というスキャンダラスな話題とによって大ベストセラーとなったのが、1966年である。それから30年以上たった現在では、『言葉と物』はすでに古典とよんでいい書物になっている。「人文科学の考古学」という副題をもつこの作品は、ルネッサンスの知、古典主義時代の知、近代の知を分析し、人文諸科学の誕生を解明したうえで、人間の終焉を予告するわけだが、本論で私が扱いたいと思うのは、古典主義時代の知の配置である。私ももちろん「人間の終焉」とか、マルクス主義の無効性を主張して物議を醸したところに興味をひかれるのだが、そこに行くまえに、いわば足場を固める意味もあって、古典主義時代のエピステーメーについて論じておきたい。

『言葉と物』はすくなくとも私にとっては、きわめて難解な書物である。長い間、私はこの書物を前にして、戸惑っていた。解説書の類いを読んでも、いっこうに理解した気分になれない。つい最近になって、ようやく入り口を見つけたような気がしたのだが、まだまだ十分に読みこなせている自信はない。せめて本論を書くことによって、いくらかすっきりしたいと思うのである。

私にはフーコーに対するある種のわだかまりみたいなものがある。たとえば『知への意志』で、フロイトよりシャルコーに重要性を与えたり、『言葉と物』でマルクスの獨創性を無視し、リカードに従属させたりするところは、マルクスやフロイトから深い影響を受けて来た私には、とても承認しがたい。私はフーコーを一級の思想家と認めるのはもちろんだが、それでもある種の違和感を感じるところもあることを断っておきたい。

1

『言葉と物』において、フーコーが立てる問題は次のようなものである。

歴史一般にとって、不連続性のあり方を決定するのは容易ではない。思考の歴史の場合、それはおそらくなおのことそうだ。分割線を引いてみようというのか？だが、あらゆる境界線は、無限に流動する総体の恣意的な切断にすぎまい。一つの時期を切りとろうと望むのか？しかし、二つの時点において対称的な切断をおこない、両者のあいだに一個の連続的で統一ある体系を出現させる権利が、そもそもわれわれにあるのだろうか？そのような体系が成立すること、ついでそれが消滅し崩壊すること、それは何に起因するのだろうか？体系の存在と消滅とは、どのような

体制にしたがいうのか？体系の内部に整合性の原理があるのなら、この体系を忌避しうる外的要素はどこからくるのだろうか？思考は、みずからと異なるものまゝでいかにして身をかかわることができるのか？一般的にいて、ひとつの思考をもはや思考しえないとはどのようなことであろうか？そして新たな思考を創始するとはどのようなことであるのか？¹⁾

ルネッサンスの知は、類似を原理としていた。類似によって世界を解釈し、その解釈は際限のないものとなる。そして、言葉と物とはたがいに交錯しあっていた。さらに第一義的な《テキスト》というものがあ、それについて注釈を積み重ねた。

ところが、古典主義時代に入ると、類似という原理は新しい知の配置、新しい《エピステーメー》によって、むしろ錯誤の機会として、排除される。類似の時代は終わり、かわって同一性と差異という原理が現れる。デカルトによってそれを代表させることができるだろう。言葉と物とは別の次元へと分離する。注釈すべき根源的テキストは消失し、批評が注釈にとってかわる。ルネッサンス期には生々しいものであったランガージュの存在 (être) は中和化され、ランガージュが表象に対してまったく透明なものとなったため、もはや問題であることをやめる。古典主義時代のエピステーメーを支えるのは「表象」(représentation)である。

ここに知の不連続性を見てとることができよう。

ルネッサンスの記号の理論は、標識によって示されるもの、標識となるもの、後者のうちに前者の標識を認知することを可能にするものという三項からなっていた。第三項がルネッサンスの知の原理としての類似性である。記号はそれが示しているものと類似していることによるのみ、標識とみなされたのだ。この三元的体系が消滅し、古典主義時代には、記号についての二元的組織が出現する。それは、所記となる観念、能記となる観念、後者のうちにおける表象機能の観念という三つの項からなるようにみえるが、実は能記が二重化されているにすぎず、あくまで二元的体系と考えるべきであるとフーコーはいう。「ある観念が他の観念の記号となりうるのは、両者のあいだに表象関係が設定されうるばかりではなく、この表象作用が、表象するほうの観念の内部につねに表象されうるからである」²⁾ すなわち二重化された表象である。

それに、古典主義時代には、いかに奇妙に思えようと、「意味作用」(signification)というものは存在しなかった。表象の理論が、意味作用の理論の可能性を排除するのである。

さらに、記号の二元的理論が表象の一般的理論と根本的關係を結ぶ。

フーコーは、古典主義時代の表象の自律的な空間のあり方を、ベラスケスの『侍女たち』の精緻な分析を通して、明らかにしている。また、セルバンテスの『ドン・キホーテ』を古典主義時代の最初の作品として提示している。

秩序に関する一般的な学問の企て。表象を分析する記号の理論。同一性と差異との秩序あるタブローへの配分。古典主義時代において、経験性の空間はこのように構成された。この空間は、ルネッサンスの終わりまでは実在しなかったものであり、また、十九世紀初頭には消滅する運命にある。³⁾

秩序の学は、《マテシス》と《タクシノミア》からなる。代数学に根拠をおく《マテシス》は単純な自然を秩序づける。記号の体系による《タクシノミア》は複雑な表象を秩序づける。そして秩序に関する学問は、認識の起源についての問いを必然的にする。《発生論》(genèse)である。

《マテシス》、《タクシノミア》、《発生論的分析》という分節的体系が、古典主義時代の知の基本的構図である。そして、そこから、この時代の知の中心としての《タブロー》が現れる。タブロー

の空間に宿る知の三分野としてフーコーが取り上げるのが、一般文法、博物学、富の分析である。これらはいずれも、物そのものではなく、表象についての学といえる。以下、一つずつ検討していこう。

2

まず、一般文法が論じられる。

ランガージュの存在が消失すると、残されるのは純粹な表象作用であり、言語記号によって表象される表象そのものである「言説」(discours)である。

思考という単一なものを、ランガージュは線状に、つまり継起的に展開せざるをえない。ランガージュは思考を分析し、それを空間において順序づける。ここに「一般文法」(grammaire générale)が位置する。「〈一般文法〉とは、《表象されるべき同時的なものとの関係における、言語上の順序の研究である》」⁴⁾ 一般文法が対象とするのは、思考でもラングでもなく、言説である。

一般文法は、命題の理論(動詞の理論)、分節化の理論、指示作用の理論、転移の理論の四項からなる。

命題の理論、もしくは動詞の理論は、語と語とを結びつけるものの研究である。命題は、ランガージュのもっとも一般的で、もっとも基本的な形式であり、命題以下のところに存在する語は、それだけではランガージュとみなされない。起源における人間の叫びがランガージュとよばれるものになるためには、たとえ一音節語の内部であるにしても、命題としての関係をそなえる必要がある。命題は、主辞と属辞、そして両者を結びつける繫辞という三つの不可欠の要素からなるが、繫辞の役を果たすものとしての動詞は、言説の必須な条件であり、動詞なくしてランガージュはありえない。「二つの物のあいだに主辞=属辞関係(lien d'attribution)が肯定されるとき、つまり、AはBで《ある》というとき、そこに命題——そして言説——が生じるのだ。すべての動詞は《ある》(être)を意味する唯一の動詞に帰着する」⁵⁾

分節化の理論の中心になるのは、《名ざす》ということ、すなわち名詞の問題である。語はその本性において名詞であるが、それはあるひとつの表象に向けられている以上、まず固有名詞である。しかし、名詞が固有名詞であるなら、それは名ざすべき対象と同じだけなければならないことになる。そうなると、命題が成立しないから、ランガージュはランガージュであることをやめるだろう。そこで名詞が一般性をもつことが必要になってくる。一般性をうるためには、分節化が行われなければならない。異なるものを分離し、たがいに同一性をもつものをまとめる水平的分節化と、深層に実体があり、表層に品質があるような垂直的分節化とである。前者は実詞に、後者は形容詞に対応する。「このように、ランガージュの本源的な分節化は(・・・)、直交する二本の軸、すなわち、個体から一般へ向かう軸と実体から品質へ向かう軸、に沿っておこなわれるわけだ。この両者の交点に普通名詞が、一方の軸の先端に固有名詞が、他方の軸の先端に形容詞が位置するのである」⁶⁾そして、すべての語は潜在的には名詞であると考えられる。たとえば接続詞や前置詞は、もともとは身振りを表す名詞だったというように。一般文法において、名詞は特権的な位置を占める。

つぎに指示作用の理論を見てみよう。上で述べたように、古典主義時代においては、名詞が中心になるわけだが、ランガージュの根本的な機能が名ざすことであるならば、ランガージュは判断であるより、むしろ指示である。「ランガージュの起源をあきらかにすること、それは、ランガージュが純然たる指示であった原初の瞬間を再発見することである」⁷⁾ランガージュの恣意性を説明するのが、動作によるランガージュの分析であり、ランガージュとそれが名ざしているものとの絆を説明するのが、語根の研究である。

動作によるランゲージュを語るのは身体であるが、身体のためなる延長にすぎないかぎり、動作はまだランゲージュとは考えられない。ランゲージュとなるためには、一定の複雑な過程をたどらねばならない。

語根の理論は、動作によるランゲージュの分析といささかも矛盾しない。語根とは諸ラングのうちに見いだされる基本語であるが、それらは自然に強制され、自然発生的に生じたのであり、それがランゲージュのなかに取り込まれたのである。語根はオノマトペなどの形で生み出されるが、語根の分析は決して歴史への回帰ではない。語根の理論がランゲージュの歴史性を示すものではないということは、十八世紀の語源研究と対比すればわかる。

転移の理論は、いかにして語が、その原初の意味から遠ざかり、意味の広がりを生み出すかを問う。

文字表記には、表音文字と象形文字があり、フーコーは象形文字のうちに三つのタイプを区別している。象形文字をもつランゲージュにおいては歴史が停止してしまうのに対し、アルファベット文字をもつ場合、人間の歴史には進歩が生まれる。

「起源にあっては、すべてが名——固有の、あるいは単称的な名——をもっていた。ついでこの名が、その物の含む一要素だけの名となり、さらに、この要素をひとしく含んでいる他のすべての個体にも適用された。もはや特定の柏の木が《木》と呼ばれるのではなく、すくなくとも幹と枝をもつものはすべてこの名で呼ばれたのである。」⁹⁾これが転移であり、修辞学という比喩形象 (figure) にもとづいて行われる。

結局、一般文法を構成する、命題、分節化、指示作用、転移の理論は、「ランゲージュは分析する」ということに帰着する。これは、ルネッサンスの「ランゲージュは語る」という言語体験からの転回であるといえよう。

そして、命題、分節化、指示作用、転移の理論は、フーコーが「ランゲージュの四辺形」と名付けるものを構成する。

それらは二つずつ対立し、二つずつささえあっているのだ。分節化は、命題のまだ空虚な純然たる言語形式に内容を賦与する。それは命題の形式をみたすものだが、物同士を区別する命名行為が物同士を結合する主辞＝属辞関係定立と対立するように、命題と対立している。指示作用の理論は、分節化によって截断されるすべての名詞形態の物との接合点をあきらかにするが、瞬間的な、身振りによる、垂直の指示作用が一般的なものの截断と対立するように、分節化と対立する。転移の理論は、起源以来の語の連続的運動を示すが、それが扱う表象表面の変位は、指示作用の理論によって問題とされる、表象と語根との唯一で安定した関係と対立する。そして最後に、転移は命題に回帰する。なぜなら、転移がなければ指示作用はそれ自体と重なりあったままで、主辞＝属辞関係を可能にするあの一般性を獲得することはできないからだ。けれども、転移が空間的な比喩形象にしたがっておこなわれるのにたいして、命題は継起的順序にしたがって展開されるのである。⁹⁾

さらに、この四辺形の頂点のあいだに、対角線的な関係がある。分節化と転移のあいだ、命題と指示作用のあいだである。そして、この二本の対角線の交点、すなわち四辺形の中央に《名》(名詞)がある。名ざすとは、表象をタブローのなかに位置付けることであり、《名》こそが古典主義時代のすべての言説を組織する。つまり、名称体系と分類法である。

3

十八世紀には生物学は存在しなかった。なぜなら「生命」という概念それ自体がなかったからである。そのかわりに、博物学が存在した。博物学とは、生物を可視的な構造において記述することで、それに名をあたえ、タブローのなかに位置付ける作業である。博物学において、植物が観察されるとき、記録されるべきものは、リンネによれば、数、形、比率、位置の四項である。「ある器官なり任意の要素なりの指標としてそれを限定するこの四つの値を、〈植物学者〉たちはその器官あるいは要素の〈構造〉と呼ぶ」「構造は、可視的なものを制限し濾過してそれをランガージュで書き写すことを可能にする。構造のおかげで、動植物の可視性は、それを記録する言説のなかに完全に移行するのだ」¹⁰⁾ 記述とその対象の関係は、命題とその表象の関係に等しい。ただし、ランガージュでは、同一の表象が多数の命題を生むことがあるのに対し、構造による記述は、同一の対象についてはただ一つあるだけである。博物学における《構造》の理論は、一般文法における命題と分節化の理論を一つに重ねあわせる。また構造は、博物学を《マテシス》に結びつける。

構造による可視的なものの記述は、固有名詞でしかないだろう。つまり指示である。博物学がよくできたラングとして展開されうるためには、固有名詞から普通名詞への移行がなされねばならない。それは《構造》から《特徴》への移行である。「博物学は、確実な《指示》と制御された《転移》とを一挙におこなうべきである。そして、構造の理論が分節化と命題とをたがいに重ねあわせたのとおなじく、《特徴》の理論は、指示をおこなう値とそれらが転移する空間とを一体化するものでなければならぬ」¹¹⁾ 特徴とは、植物同士を本質的に区別し、それらを名付けるのに役立つものとしての特権的構造である。

博物学には、〈方法〉と〈体系〉という二つの技法がある。〈方法〉とは、類似点が多く、差異の列挙の容易なある群の内部で全面的比較をおこない、順次、同一性と差異を設定していく。〈体系〉は、限られた数の特質を選び、その恒常性や変化をすべての個体において研究することである。方法と体系は対立する。だが、その対立にもかかわらず、両者は同じ認識論的台座の上に立っているとフーコーはいう。ここにフーコーの方法の一つの特徴が見てとれる。吉本隆明の言葉を借りれば、「ある対立している二つの配置（・・・）があり、その対立は決定的に両立し難いようにみえるほど根柢的なものであっても、その対立する二つの配置を共通させている唯一の根柢があり、この根柢がじつは二つの配置の対立を統御しているという思考方法である」¹²⁾ いずれにせよ、ルネッサンスの《標識》の理論と、近代の《有機体》の理論の中間に、分類の学としての博物学は位置するのである。

博物学にとって、構造を特徴へ変換すること、いいかえれば、固有名詞から普通名詞に移行することは、自然の連続性を必然的に前提とする。連続体のみが、構造の特徴への変換を可能にするのである。また、自然のなかに存在する無秩序や混乱はどこに由来するかが問われる。それは、地球と太陽の関係、気候状態、地殻の変動などによるのであり、生物はその二次的な影響を受けるのである。《天変地異》(catastrophe)が問題とされる。

古典主義時代の知のなかには進化論はまったく存在しない。時間というものが、生物の内的な発展原理とはみなされず、外的空間に起こる変動としてしか考えられなかったからだ。十八世紀に存在したとされる進化論のタイプの思考は、今日の進化論とはなんの関係もないのである。そこで介入してくるのが、畸形と化石である。「畸形と化石は、タブローと連続体のあいだにあって、分析がやがて同一性として規定するであろうものがまだもの言わぬ類似にすぎず、分析が指定しうる恒常的差異としてやがて規定するであろうものがまだ気ままな偶然の変異にすぎぬような、陰翳にとんだ、流動的な、揺れうごく地域を形成している。（・・・）連続体を背景として、畸形は差異の発

生をいわば戯画的に物語り、化石はその不確かな類似によって、同一性の最初の執拗さを想起させるのである」¹³⁾

博物学はランゲージュの理論と切り離せない。博物学はランゲージュと同時のものであり、同じ空間のなかに起源を見いだす。《構造》は分節化と命題を重ねあわせ、《特徴》は指示作用と転移を重ねあわせる。

博物学が生物学でありえなかったのは、十八世紀末まで「生命」という概念が存在しなかったからだ。「博物学者とは、構造化された可視的なものを取りあげ、特徴となる名称をあたえる人間であって、生命を扱う人間ではないのである」¹⁴⁾

4

最後に取り上げるのは、「富の分析」である。古典主義時代には、経済学はなかった。「生産」という概念が存在していなかったからである。これは、この時代には、「生命」という概念がなかったために生物学が存在せず、博物学があったのと同様のことだ。しかし富の分析は、それが実践や諸制度と結びついているので、一般文法や博物学とはすこしずれるとフーコーはいう。

まず十七世紀の「重商主義」がある。普通、重商主義は富と貨幣の混同によって特徴づけられるが、実際には、貨幣を富を表象し分析する道具とし、富を表象される内容とする関係を設定した。ただし、貨幣が富の記号であるためには、貨幣自体が富でなければならず、貨幣が富となるのは、それが記号だからである。重商主義は、貨幣と価格を表象の分析の問題に仕立てあげてゆく、ゆっくりにしたプロセスだった。

価値について、二つの考え方がある。交換によって価値が生じると考えるか、価値のあるものだから交換されると考えるかである。そこで、重農主義と有用性の理論という対立する二つの理論が存在する。

重農主義によれば、価値があるためには交換がなければならない。つまり、人があるものを余分に所有していて、他の人がそれを必要とするのでなければならない。ところで、交換によって価値が成立する際には、かならず財の減少がともなう。運搬、保存、加工などの費用である。製造業が生み出す価値の増加は、その仕事から報酬を得る人々の必要を満たすにすぎないが、農業労働の場合には、それにたずさわる人々が必要とする以上の価値の増加が生じる。そういうわけで、農業は他の産業に対して特権的な意味をもち、重農主義者たちは「地代」を重要視する。地代は純生産物という余分に生み出された財を表すのである。

重農主義が一般文法における指示作用に照応するのに対し、有用性の理論は命題の理論に照応する。有用性の理論は、重農主義とは対照的に、交換されるから価値があるのではなく、有用な価値をもつから交換されると考える。だが、それは同じ線分を逆方向にたどるだけで、帰するところは同一なのである。「つまり、あらゆる富は土地から生じ、物の価値は交換と関係があり、貨幣は流通状態にある富の表象として価値をもつ、すなわち、流通は可能なかぎり単純かつ完全でなければならぬとされているのだ」¹⁵⁾

「学説論」(doxologie)からすれば、重農主義は土地所有者を代表し、有用性の理論は商人や企業家を代表すると考えられるが、知の考古学は、重農主義的知と効用說的知という対立しあう二つの理論を、同時に可能にする条件の分析を試みる。

《富の分析》は《一般文法》や《博物学》と同一の認識論的配置にしがっている。富の分析における《価値》は、博物学における《構造》に対応し、分節化と命題の重なりあうところに位置する。また、《貨幣》と《価格》は《特徴》に対応し、指示作用と転移の重なりあうところに位置す

る。ランガージュの四辺形は、一般文法から導き出されたものでありながら、同時に、博物学や富の分析の基本的構図となるのである。一般文法において、《構造》《価値》の位置を占めるのは、〈結合法〉(Ars combinatoria)であり、《特徴》《価格》の位置にやってくるのは〈百科事典〉である。ただし、まったく一致するというわけではない。「ランガージュの無秩序な秩序のなかには、ある種の技術との関係、およびこの技術に課せられた際限のない任務とのたえざる関係が含意されているのにたいして、自然と富の秩序は、構造と特徴、価値と貨幣の実在という、単純な事実のうちに顕示されるのだ」¹⁶⁾

以上、古典主義時代の知について検討してきた。フーコーが『ドン・キホーテ』をこの時代の始まりを告げる作品ととらえていたことはすでに述べたが、彼は古典主義時代の幕を閉じるものとしてサドを取り上げる。サドとともに、セクシュアリテの時代が始まり、欲望の暗い力が表象の限界に押し寄せてくる。『ジュスティーン』と『ジュリエット』は古典主義時代の言説の限界である。そこでは、暴力、生と死、欲望、セクシュアリテといったものが極限までつきつめられ、その影は現代のわれわれにまで及ぶ。そして十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、富の分析、博物学、一般文法は、「労働」、「生命」、「言語」の登場とともに、それぞれ、経済学、生物学、文献学にとってかわられ、そこで近代の知が始まるのである。それは同時に、認識の主体にして客体である「人間」の出現であった。

註

- 1) Michel Foucault, *Les mots et les choses*, (以下MCと略す)、Collection Tel, Gallimard, p.64
ミシェル・フーコー、『言葉と物』、渡辺・佐々木訳、新潮社、p.75。引用に際しては、おおむね邦訳にした
がったが、かなり変更したところもある。記して、訳者に感謝したい。
- 2) MC, p.79, 訳書、p.90
- 3) MC, p.86, 訳書、p.97
- 4) MC, p.97, 訳書、p.107
- 5) MC, p.109, 訳書、p.119
- 6) MC, p.113, 訳書、pp.123-124
- 7) MC, p.120, 訳書、p.130
- 8) MC, p.129, 訳書、p.140
- 9) MC, p.131, 訳書、p.142
- 10) MC, p.147, 訳書、p.158
- 11) MC, p.151, 訳書、p.162
- 12) 吉本隆明、『世界認識の方法』、中央公論社、1980、p.171
- 13) MC, p.170, 訳書、p.180
- 14) MC, p.174, 訳書、p.184
- 15) MC, pp.212-213, 訳書、p.221
- 16) MC, p.218, 訳書、p.226

平成9(1997)年9月16日受理

平成9(1997)年12月25日発行

